

ことばのしくみとその障害 —言語聴覚士の仕事—

入 山 満恵子

明倫短期大学 歯科衛生士学科専攻科 保健言語聴覚学専攻

Mechanism and Impairment of Speech and Language: The Speech language hearing therapist's role

Mechanism and Impairment of Speech and Language

Maiko Iriyama

Department of Communication Disorder, Meirin Collage

要旨

私たちは、日々「ことば」の恩恵を受けながら生活を営んでいるにもかかわらず、そのことについて考える時間はあまりにも少ない。そして、「ことば」は失ってみて初めてその有難さがわかるものである。そこで、「ことば」がいかに多くの機能に支えられているのかそのしくみを考えるとともに、言語聴覚障害の種類やその詳細、またそれらの障害に悩む人々を支援する「言語聴覚士」という仕事について紹介した。

キーワード：ことばのしくみ 言語聴覚障害 支援
言語聴覚士

Keywords : Mechanism of speech and language,
Speech language hearing impairment,
Support,
Speech language hearing therapist

1. はじめに

私たちは日常、口を開けば「出てくるのが当然」のごとく「ことば」を用いているが、その役割を意識することはほとんどない。しかし、中には先天的に、あるいは何らかの疾病や事故によって「ことば」をうまく使えずに苦勞している人々が多く存在するのまた事実である。そこで今回、私たちが普段全く意識せずに使用している「ことば」について、そ

のしくみや働きを考えるとともに、多種多様な言語（聴覚）障害の種類および人口に占める割合、またそれらの問題で悩む人々を支援する「言語聴覚士」という仕事について考えていきたいと思う。

2. ことばのしくみ

「ことば」は言うまでもなく私たちにとって欠くことのできないコミュニケーション手段であるが、その機能は複雑でかつ奥深い。ことばには「話す」「聞く」「読む」「書く」という機能があり、それぞれが結びついて成り立っている。すなわち「話す」「聞く」は音声による言語であり、「読む」「書く」は文字で表す言語である。さらに、「話す」「書く」は表出のための行為であり、「聞く」「読む」は入力、すなわち理解するための行為である。（図1）

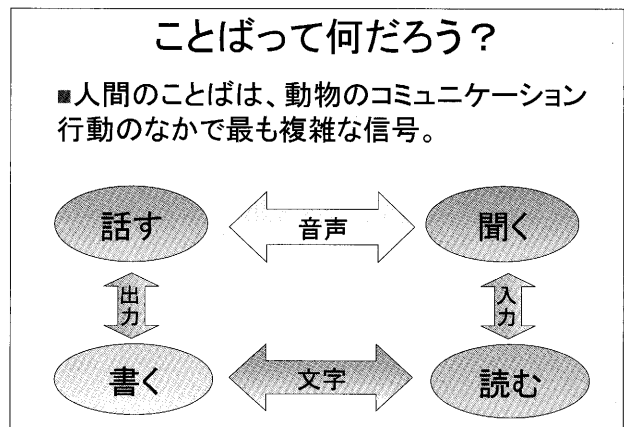


図1 ことばのしくみ

3. ことばの鎖

次に、しばしば「ことばの鎖」と表現される一連の、ことばのやりとり（会話）について考えていきたい。（図2）まず、過程のひとつとして重要なのが、「耳からの入力（＝聴覚）」である。また、聴覚が正常な場合でも、伝えられた情報を脳で理解する力がなければ「音」として認識できるものの、内容を考えることはできない。これは、私たちがことばの通じない外国などに行ったときのことを考えれば容易に想像できるであろう。さらに、脳の中では「理解すること」と「話すこと」を担う部分が異なっているため、「内容を理解し返事を考え、話す」という一連の作業を考えたとき、脳における「理解」担当の部位から「話す」ところへスムーズに情報が伝わらなければならない。加えて、音声で話すためには肺からの呼気、口腔とその周辺に関係する様々な筋肉を正確に作動させねばならず、その命令も全て脳が統括している。したがって、各筋肉に命令が正確に下されること、その命令通りに筋肉が動くことも必要である。

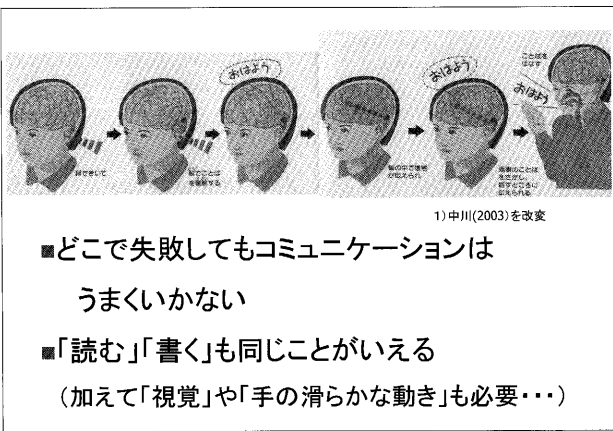


図2 ことばの鎖

このような一連の過程を経て表出された音声は、空気の振動によって相手の耳に伝えられ、また同様のことが繰り返される。これらのことはキャッチボールのようにテンポよく展開され、どの過程で失敗してもコミュニケーションはうまくいかない。このように、「ことば」はつながっているのである（それが「ことばの鎖」といわれる所以であろう）。また、「読む」「書く」も同様のことがいえるが、さらにそのためには「視覚」や「滑らかな手の動き（運動機能）」も必要となる。

4. ことばの障害の問題点

多くの機能によって支えられている「ことば」であるが、そこに何らかの障害が生じたとき、問題は非常に複雑かつ深刻である。ことばや聞こえの障害は目に見えるものではないため相手に理解されにくい。さらに理解されないために誤解を受けやすいということ、そして何よりも「自分の障害をことばにして相手に伝えられない」というもどかしさと苦しみがある。私たちは、自分の身に起きた出来事など様々な思いをことばにして相手に伝え、感情を共有することで深い安心感・充実感を得る。相手に伝えることで楽しいことは倍以上に、悲しみや苦しみは軽減するのである。そのこと自体がうまくいなくなってしまったとき、心は満たされず、さらに相手の反応によっては深く傷つき、本来であれば楽しいはずのコミュニケーションそのものが恐怖になってしまうことも十分あり得る。ことばや聞こえの問題が与える精神的ダメージは、目に見えなくとも非常に大きく、また日常生活を営む上でその影響は計り知れない。

5. 言語聴覚障害とは

ことばや聞こえの問題は「言語聴覚障害」とも表される。言語聴覚障害はどの年齢でも生じる可能性があり、子どもから大人まで幅広い年齢層で見られる。子どもの場合は、生まれながらにして様々な原因によって（あるいは原因が不明なことも多い）、ことばの獲得そのものが遅れる場合が多く、また、発音の問題で悩むケースなどもある。一方、大人の場合は一度獲得された言語機能が、疾病や事故などにより失われてしまうため、子どもの問題とは性質が異なる場合が多い。（図3）

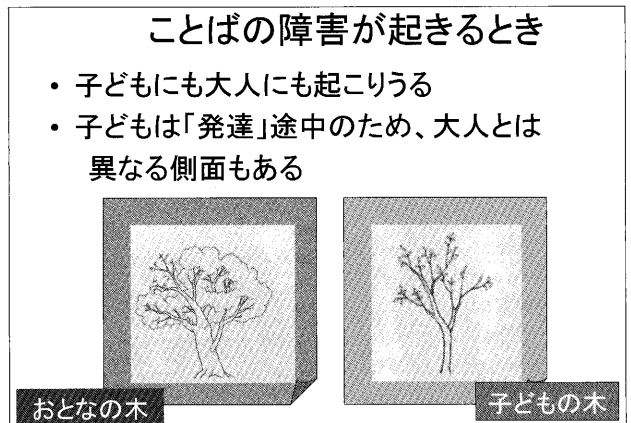


図3 おとなと子どもの障害の違い

大人の言語聴覚障害の原因としては、まず何と云っても「脳の問題」が圧倒的に多い。(2. ことばのしくみ)の項で前述したように、「ことば」「聞こえ(理解)」の機能は脳が多くのことを支えているために、脳血管障害や頭部外傷によるダメージで、ことばに関する機能が著しく低下する例は多い。その代表的なものとしては、「失語症」「高次脳機能障害」によるものなどが挙げられる。また、口腔周辺および口腔内部、喉頭や肺などの疾患によって発音や音声の問題が生じ、さらに近年は高齢化社会ということもあり、高齢者における飲み込み(=摂食・嚥下)の障害も増加している。聴覚障害がことばに及ぼす影響は、大人でも子どもでも深刻である。

子どもの場合は、知的障害によることばの獲得の遅れ、高次脳機能の問題である学習障害、生まれつき人との関係をうまく築くことができない広汎性発達障害(自閉症など)、口蓋裂などによる構音の問題などさまざまである。

6. 言語聴覚障害者一人口に占める割合

言語聴覚障害の患者は実際どのくらいいるのだろうか。諸外国のデータでは、人口の約5%が言語聴覚障害の問題を持っているという²⁾。この数字を単純に日本の人口に当てはめると、約600万人が該当する。さらに、この数のうち、「何らかの専門的な支援を必要としている人々」は約105万人とのことで、内訳としては「聴覚障害」が半数以上、次いで「失語症」「ことばの遅れ」「構音の問題」などが挙げられ、その種類も幅広い。(図4)また、この数には飲み込みの問題である「摂食・嚥下障害」は含まれていないため、それらも含めると支援についてはさらに多くのニーズがあると考えられる。

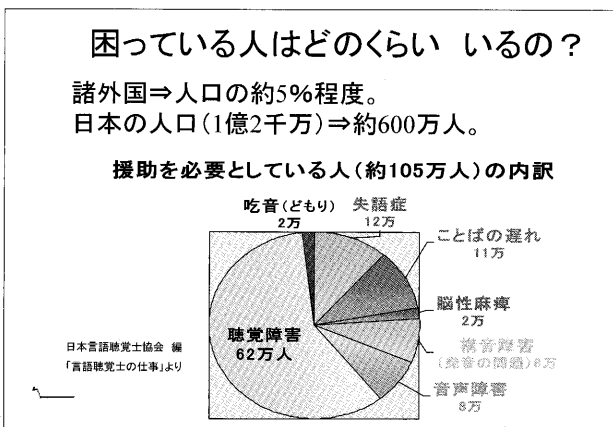


図4 言語聴覚障害者の人口比率

7. 言語聴覚障害の支援

言語聴覚障害の支援に対するニーズは、具体的に何が考えられるであろうか。その答えの一つが「言語聴覚士」という職種が存在である。言語聴覚士=STはSpeech language hearing therapistの略であり、ことばや聞こえの問題を抱える人に対して専門的な支援を行う国家資格である。平成9年に言語聴覚士法が制定され、翌年に施行されたというまだ比較的「若い」資格である。その職務内容は、日本言語聴覚士協会のホームページに拠れば³⁾、「ことばによるコミュニケーションに問題がある方に、専門的サービスを提供し、自分らしい生活を構築できるよう支援する専門職。また、摂食嚥下の問題にも専門的に対応」と記されている。

8. 言語聴覚士が働く分野

言語聴覚士が活躍する分野は、医療、福祉、教育の場に大別される。医療の場ではリハビリテーション科、耳鼻科、脳神経外科、口腔外科などに所属している場合が多く、福祉では児童相談所から高齢者のための老人保健施設など対象年齢層も医療機関と同様に幅広い。また、教育現場においては聾学校やことばの教室などもある。その他としては、まだ少数ではあるが健診業務を行う保健機関、あるいは将来言語聴覚士を目指す人たちを養成するための機関(大学、専門学校など)で働く言語聴覚士もあり、一つの枠にとらわれない。

9. 業務内容

具体的な業務としては、まず対象となる方のことばや聞こえの状態を詳しく調べる。その際、本人および家族などからの情報収集は重要であり、その際にはコミュニケーションがうまくいかないと悩む方の多くが対象となるので、言動には十分注意して確実な信頼関係を築くことが必要である。また、多種多様な検査から、その症状を的確に判断できるような、適切なものを選別することも重要な業務となる。次に、検査や評価に基づき各人に適した支援を考える。ことばの問題は完治するケースばかりではないが、それでも適切な治療や訓練プログラムにより確実に本人および周囲の負担は減少する。そのため、慎重かつ正確な計画をたてることが要求される。同時に、ことばの問題は刻々と変化するものも多く、一度計画した訓練・治療内容を見直す必要もある。

また、訓練や治療によっても効果を見出せないと予測される場合、あるいは効果がない場合には、コミュニケーションを補助する補助代替装置の提案も併せて考えなくてはならない。

加えて言語聴覚士の業務として重要なのが「環境調整」であろう。ことばや聞こえの問題は、本人の考えが正確に伝わらない場合が多い。本人に代わって、現在の状況を周囲に伝え、どのようにすれば意思疎通がうまくいくのか、あるいはどのような点を具体的に注意すべきかなど、より快適にコミュニケーションを築くことができる環境を整えていく必要がある。

10. 有資格者数

前述した〈5. 言語聴覚障害とは〉の中で、現在何らかの支援を必要としている言語聴覚障害者数を「約105万人」と記述したが、その数に見合うだけの言語聴覚士（有資格者）がいるかという点、現時点では不足している。（図5）1人の言語聴覚士が担当する対象者数を30人程度と仮定すると、必要な数は最低でも約3万6千人ほどになる。ところが現在の有資格者は9909人、先ほどの数に当てはめると言語聴覚士1人が担当する患者さんの数は約100人であり、不足は明らかである。もちろん、実際の状況をこのような単純計算で示すことはできないが、言語聴覚士が今、不足していることは間違いない。

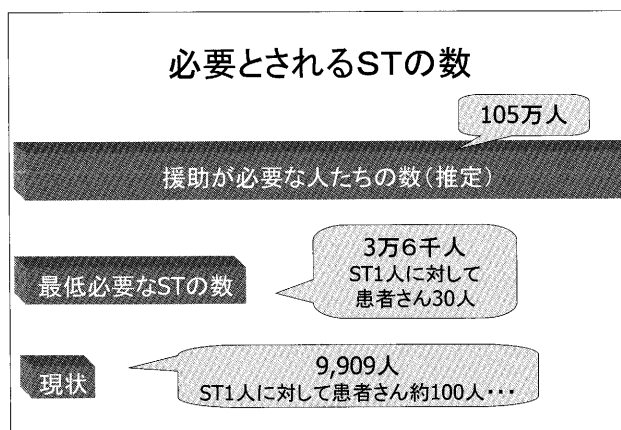


図5 必要とされるSTの数

11. 養成の状況

言語聴覚士を養成するための機関は年々増え、有資格者数は順調に増加している。言語聴覚士になる

ためには国家試験の受験が必要であるが、現在では、カリキュラムの整った大学や専門学校などの養成校に入学し、国家試験の受験資格を得た上で資格を取得する方法が一般的である。現在は全国に約50の養成機関があり、新潟県内では新潟医療福祉大学、新潟リハビリテーション専門学校（いずれも4年制）、そして明倫短期大学がある。各校とも卒業した時点で言語聴覚士国家試験を受験するための「受験資格」が得られる。その中で、明倫短期大学は県内唯一の2年制の養成機関であり、入学以前の学歴が大学、短大などにかかわらず、国によって指定された所定の単位を履修済みであれば入学できるという全国でも珍しい入学形態をとっている。したがって入学者の経歴が様々で、バラエティーに富んでいることも特色であろう。それぞれが異なる経歴を重ねてきた学友たちとともに言語聴覚士を目指すことで、いろいろな視点での考え方を学び、そのことが幅広くかつ複雑な問題を多く扱わねばならない「言語聴覚士」になるための土台作りにも役立つのではないだろうか。

12. おわりに

以上のように、ことばや聞こえの問題は非常に身近なものであり、決して他人事ではない。また、実際に数多くの方が現在でも様々な言語聴覚障害によって、人間だからこそ楽しめるはずのコミュニケーションに苦痛を、あるいはうまくいかないもどかしさを感じている。そのような痛みを軽減するためにも、支援にあたる優秀な言語聴覚士の育成や、体制が整った施設のより一層の充実が望まれる。また、有資格者であっても日々の努力と相手への誠実さ、思いやりを忘れてはならない。

文 献

- 1) 中川信子：ことばの不自由な子どもたち。茂木俊彦（監）：16-17頁，大月書店，東京，2003
- 2) 齊藤吉人：言語聴覚士の仕事。日本言語療法士協会（編）：28頁，朱鷺書房，大阪，1998
- 3) 日本言語聴覚士協会ホームページ：<http://www.jaslht.gr.jp/whatst.html>